

結果、苦しんでいるのはわれわれ阿賀野川の住人なんだ

記録：菊池くるみ

編集校正：関礼子、谷内久美子

聞き取り場所：皆川邸

日時：2018年8月31日

【皆川栄一さん・年江さん夫妻】

栄一さんは1943（昭和18）年の7月2日生まれ。妻の年江さんは1942（昭和17）年の11月生まれ。1965（昭和40）年に結婚。1960（昭和35）年に中学を卒業後、新潟市にて大工のみならいとして働き始めた。1973（昭和48）年頃から水俣病の症状が出始める。2013（平成25）年よりノーモアミナマタ新潟第2次全被害者救済訴訟（新潟水俣病第5次訴訟）の原告団長を務める。



私の住まいはずっと阿賀町です

栄一さん：ここは、もともとは下条村³⁴だった。それが三川村になって、2005（平成17）年頃に阿賀町に合併して。昔は陸の孤島みたいなところだったんですよ。対岸の山添い、砂利道³⁵の3メートルくらいの41号線という道ができた。新潟市から福島の平（現在いわき市）まで通っていて、新潟平線といわれていた。それが唯一の道路だった。

阿賀町は1886（明治19）年までは福島県だった。新潟県じゃなかったんですね。明治19年に新潟県に合併されたんですけど。だからこの辺の地域の言葉には福島弁が混ざってることもある。戊辰戦争の跡が今でもあるんです。

この新潟平線が一般国道49号線に昇格になったのが1963（昭和38）年です。徐々に整備されていって、全線開通したのが1970（昭和45）年なんですよ。それまでは、対岸のところまで行くのに、渡し船を使っていました。8か所の渡船場があったんですよ。その渡船場の船に乗って、家から二時間くらい余裕をもって出ないと電車に乗れなかったんです。そういう不便な土地だったんですよ。

それでも私の住まいはずっと阿賀町です。船頭をやったりしました。当然ね、川沿いに住んでる人たちは、川に精通してる人が多かったんですよ。当時は女の人も櫂を漕ぐのが上手だった。まだ小学校上がらないうちから船に乗って遊ぶもんでね。

父親も、水俣病患者だという証明ができたのかなあって

私の父親は、終戦後に帰ってきました。1948（昭和23）年ごろからかな、長船という船に乗っていました。炭とかマッチとか米とかを積んで新潟まで運ぶ川船の船頭だったんですよ。1952（昭和27）年になると、揚川ダム³⁵の工事が持ち上がりました。そのダムが完成するのは1963（昭和38）年。それからは、川船は全くなくなるんですがね。

私も、そういうところで育ったものですから、川のことはプロに近いね。川魚ってもんは、私たちの生活とは切っても切れないたんぱく質ですからね。当然この地域は、よそから、肉とか魚とかってのはまったく入ってこなかった。たまに、背中にしょって新潟のほうからホッケとかの海魚を行商人が持ってくるくらいだった。阿賀野川以外の魚は本当に珍しかった。肉なんてものはね、家で飼っているうさぎとかを正月に食べるくらいです。



34 1955（昭和30）年1月15日 - 東蒲原郡揚川村の一部（残部は他町村と津川町を新設）、下条村の大部分（残部は五泉市へ編入）と合併し、三川村を新設。

35 二級国道115号新潟平線

私の父親は船頭をやったんですけどね、1965（昭和40）年の4月の7日に川に落ちたんですよ。今考えてみると、父親は水俣病に侵されていたから落ちたんだと思いますね。船から落ちた3日後に、まだ55歳³⁶という若さで亡くなった。それから水俣病が新潟にも発生したと報道されました。正式発表になったのは6月の12日ですよ。せめてあともう少し生きてくれていると、父親も水俣病患者だという証明ができたのかなあって、悔しい思いでしたね。私も1973（昭和48）年頃から、手足のしびれや耳鳴りとか、頭の中セミが何十匹も鳴いているような症状が出始めました。そのせいで物事に集中できなかつた。それは今でもずっとそうです。

新潟でも起こりうるんじゃないかって予見できるわけですよ

国は、1965（昭和40）年に新潟水俣病が発表されるまでは新潟に水俣病が出るなんて予見できなかったというんですけれど、1956（昭和31）年に熊本で水俣病が発表されて、新潟でも起こりうるんじゃないかなって予見できるわけですよ。なんでそれを国は認めなかつたんでしょうね。

1959（昭和34）年に昭和電工の水質検査の結果が、公表されなかつたんですよ。³⁷なぜ公表されなかつたかというのと、昭和電工の社長は発表すると「まずい」ってことがわかっていたからなんですよ。1957（昭和34）年にはもう、昭和電工のカーバイドの山が崩れて阿賀野川の魚がほとんど死んでいたんですよ。それから2～3年くらいで、魚は徐々に増えてはきましたが。

日本は、水俣病という公害を分かっているながら高度経済成長期に経済を押し上げて犠牲者を増やしたわけですから。我々は、そこを今でも裁判で追求をしている。裁判所に国の責任は認められるべきだって。我々の主張を認めてくれるという事は強調していきたいなって思っているところです。

水俣病の患者ってのは本当に疑わしいんだと言われる

今のノーモア・ミナマタ第二次新潟訴訟の147名の原告団の中には、劇症型っていうか、「ああ、あの人はちょっとおかしいな」という症状の人はほとんど見えないんです。普通の人と本当に変わりません。私たちを見ても水俣病に苦しんでるって見えないでしょう？ それでも私たちは水俣病に冒されているのは事実なんです。その裁判でも、「53年も経って今さら、水俣病の患者ってのは疑わしいんだ」と言われる。国は「今、闘っている原告の患者が水俣病に見えねえ、診断書も信用できない」って主張しているわけですよ。でも、実際我々は新潟大学のお医者さんに公的な診断を受けて「それは確かに水俣病の症状が出てますよ」って言われたんです。

死ぬまで症状が和らぐってことはないですよ

年と共に、どんどん視野が狭くなっています。冬には、雪をつかんでもあまり冷たいと感じないんですよ。だから、手袋なんてのもあまりはめたことがないんです。なんでそういう現象が起きるのかね、お医者さんに聞いても、お医者さんもわからない。本当にわからない。

先日、熊本水俣病の患者会の大石利生さん³⁸という会長さんに会った。大石さんはいつでも足の下がね、砂利の上を歩いているような感覚があるらしい。それが最近には私にもある。靴を履いて歩いていると、いつも小砂利が靴の中に入ってるみたいな感覚だ。邪魔だから靴を脱いでみても何も入ってない。

年江さん：私もその症状があつてね、見てもね、何にもないのに、挟まってないのに、何かごろごろしてつから、靴下を履くようにしたんですよ。靴下が嫌いだから前はあんまり履かなかつたんですけどね。じいちゃん（栄一さん）に言ったら、じいちゃんのほうが結構私より悪いみたいだから。だからね、ずっと私も言わないようにしてるんだけど。私の場合は味覚障害つてのがね、ずっと続いている。だから火もガスも使わない。手はしびれる、とにかく足の、

36 1965（昭和40）年5月31日に新潟水俣病の公式確認、6月12日に新潟大学椿・植木教授と新潟県衛生部、阿賀野川下流域に有機水銀中毒患者発生と正式に発表

37 1959（昭和34）年、通産省軽工業局（当時）により、新日本窒素肥料（現「チッソ」）水俣工場と同種の工場（アセトアルデヒド7工場、塩化ビニールモノマー16工場）に対する「マル秘」の水質調査が全国的に行われた。これは工場に宛てた調査依頼であり、新潟県を始めとする関係自治体には知らされていなかった。

http://www.pref.niigata.lg.jp/HTML_Article/teigensyo_01.pdf（新潟水俣病問題に係る懇談会 最終提言書、2008（平成20）年3月21日）

38 水俣病不知火患者会長。2018（平成30）年7月6日死去（78歳）

指のこむら返りがひどい。お医者さんから漢方薬をもらっているんだけどね、転ぶようになったんですよ。年だからとかじゃない。結局、脚なんですよね。何か足に挟まってる感じがする。いちいちそんなことを言うと「もう、年がいつてるから」と、必ずそう言われるんですよ。もう誰にも言わないようにしてるんですよ。何十年たっても、症状が薄れることはないです。死ぬまで症状が和らぐってことはないですよ。

誰も「ミナマタ」なんて言わないから

栄一さん：1960（昭和35）年ごろかな、山の方から清水をパイプで引いてきたんですよ。それまでは阿賀野川の水を、飲料水として使ってきたんですよ。川沿いに生活してるし、水道水ってもんがないですから。阿賀野川ってのは生活に密着してますからね。学校から帰るとすぐ水汲みをするのが子どもたちの仕事でした。1965（昭和40）年6月12日の新潟水俣病が公表になってから、阿賀野市や阿賀町でも水俣病が広がってきたと思いますね。考えてみると当時患者は大勢いたんですよ。

年江さん：川のね、上の右のほう見ると、牛を洗ってる人なんかもいたりしてね。それでも私たちは「ああ、汚いのが流れてくる」って感覚はなかった。今は昔のことを言うと笑われるから、とにかく私は喋らないようにしてるけど。

でも、私たちはもういいんですよ、薬を飲んで生活してるから。でも、離れて暮らしている娘が「手足がしびれてどうしようもない、お母さんどうしたらいい？」って毎日電話をくれるんです。とにかくしびれるのが辛いんだよね。遠くにいてはどうしようもないから「新潟に帰って来い」って言うんですけど、「帰ってきてても動めるところなんてないから」って言うんです。

栄一さん：娘は1967（昭和42）年生まれですから、水俣病の症状だよ。だけど国側はね、1965（昭和40）年以降は、昭和電工も工場（水俣病の原因になったアセトアルデヒドのプラント）を閉じているから患者が出るわけないって言うんですよ。何をバカ言ってるんだと。私たちは水銀とかで汚染された魚を食べて生きてきたんだから。汚染された魚はいつまで生きてるかわからない。その当時、魚を絶対食べてはだめだとか、国からの命令とかはほとんど無かったんです。だからわれわれもずっと魚を食べ続けてきた。

年江さん：私、「ミナマタ」って意味が分からなかったからね。ミナマタ…？って。もっとも、誰も「ミナマタ、ミナマタ」なんて言わないから。それがどういう意味なのか、それが病気なのか、なんだかわからなくて。

栄一さん：やっぱり思い出すとね、ああ、完全に水俣病患者だったなって人がこの辺、何人もいました。よだれを垂らして、いつでも手ぬぐいを持って歩いて。ひどい人は寝たきりになったりね、手足が動かなくなったりして。

その頃、この地域はまだ医療ってものはあまり身近でなかったから、病気になると大変だった。医者に診てもらうなんてのは死ぬ間際。医者に死亡診断受けるために行くようなもんだよね。医者に診てもらおうということはほとんどなかった。



「お前しかいないだろう」と言われて

栄一さん：自民党から野党に政権交代し、水俣病特措法（正式名称：水俣病被害者の救済及び水俣病問題の解決に関する特別措置法）³⁹という法律を作ったんですよ。ところがね、あまりにも申請者が多くて、それでわずか2年2か月ほどで申請を締め切ってしまった。なんで私はそのとき申請しなかったか。まあさっきも話したけど、父親を22歳で亡くして、母と兄弟合わせて6人でやっていくために症状は隠してきたんです。水俣病に認定申請したり、認定されたりした患者さんは「あそこの家とは付き合うな」とか「嫁にもらったりするな」とか、この地域でもずっと言われてきたんです。だから自分も子ども二人いるし、それを考えるととてもそんなことは言い出せず、自分さえこの症状を我慢すればなんとかなるだろうという気持ちでやってきた。

ただ、なぜその締め切りの後に私が立ち上がったか。私ももう70歳になる。よく考えたらもう子どもたちも独立しているし、もう自分と奥さんの2人だけなんですよね。なんのために私はこうして我慢してきたんだろうと思って、

³⁹ 水俣病問題の最終解決を目指して制定された法律。未認定患者に一時金・療養手当等を支給することを定めた。2009（平成21）年施行。2010（平成22）年5月1日より申請受付を開始、2012（平成24）年7月31日をもって申請受付を終了した。

悔しさが滲んできたりしてね。2012（平成24）年の7月頃締め切りの2か月くらい前に申請したんですよ。ところが「もうだめだから、あきらめて」と言われたんですね。そのときに阿賀野患者会とかがあるということは、われわれは全く知らなかったわけですから。

そのあと、電話をして阿賀野患者会のお話を聞いたんです。2013（平成25）年の正月に相談に行ったんですけど、そのときに集まったのは4人しかいなかったんですよ。「特措法は締め切られてしまったし、認定申請をして審査会で認めてもらうか、裁判を起すかしか道はない」ということを言われたわけですよ。それで、申請はしたんですけども、特措法という緩やかな法律は救済の申請を締め切ってしまった訳ですから、もう「認められるってことは厳しい」と。そんな中、裁判を一緒に闘うか、裁判をやるかってことになり、2013（平成25）年の春の5月ごろになったら、10人くらいの方が集まったんですよ。徐々に「私も、私も」ということで、12月の11日に裁判を起すということになりました。裁判所へ訴訟を出しに行った時は22名だったんです。それがわずか4年半で147名まで原告が増えたというわけです。

訴訟を起すときに患者会事務局長の酢山さんが「核となる方がいない」ということで「皆川さんしかいないだろう」と言われて原告団長になりました。「いやあ、とてもじゃないが、喋るのも書くのも聞くのもんちんかん、出来ねえな」と言ったんですけども、「誰かがやらないと裁判ができない」、そう言われて。

自分が言い始めてしたんだから。最初は「まあ、じゃあやってみるか」と思うぐらいでした。が、喋るの苦手なのに、熊本や東京の患者会や箱根や九州や大阪に引っ張り回されてね。法的なこと分かりませんから、そこは弁護士さんに任せるだけです。こっち側についてくれるのは45人ぐらいの弁護士さんで、中心になっているのは10名ほどです。新潟水俣病の裁判は今我々が闘っているのは第5次ですが、自分が歩んできた道を弁護士さんに話して闘っています。

年江さん：私は本当に悔しいんですけど「特措法」という意味がわからなくて、裁判も受けなくてお金だけ貰う人がいたんですよ。そういう人達は口をつぐんでるし、「誰が水俣病なんだろう？」なんて顔してるから、私にとってはとても悔しいですよ。

栄一さん：集落の人は阿賀野川に生きてきた。魚食べてきたのは事実ですからね。それなのにあまりにも簡単に認められた方がいて、我々はこうして苦勞して国に文句を言われ、昭和電工に認められないと言われて、これだけ苦勞して、「過去のことだ」、「終わったことだ」なんて言われる。

年江さん：よく「金いっぱいもらったろ？」と言われる。「なんの金だ」と思うんですよ。裁判の真っ最中だからね。すぐ田舎もんはお金、お金、って言うんですよ。そして、言おう言おうと思っていて、たった一つ言わせてもらうと、あの役、この役とうちの父ちゃんが出かけると、留守番するのが私一人なんですよ。夜が怖くてね。昼間どっか行っても別に全然気にならないんだけど。大事な役しているから何も言えないけれども、「大変な役を引き受けたな」と思っています。思っているけど、でもこの大事な役をするのは誰でも良いということではないから、選んでくれたんだから、やっぱりそのことには感謝しています。

公害問題が起こってしまえば、長い年月をかけても元に戻らない

栄一さん：今ね、阿賀野川で魚とりしてるのは近辺で私だけ。鮭、鱒、鮎、鰻とかやつめとか様々な魚がいっぱいたんですけど、今は10種類ぐらいしか見られません。魚の種類は少なくなりました。

何故そうなったのかと言うと、やはり文明ですよ。ダムができて、水がせき止められて、そこで沈殿物が溜まって、水温が下がって、外来種が入ってきて、ブラックバスやアメリカザリガニ。昔はそんな魚いなかった。私は子どもたちに話したりするけれど、自然を壊せば100年たっても元に戻らないですよ。

昭和電工はアセトアルデヒドの製造で水銀を垂れ流して。国の国策としてそういうことをしてきた。結果、苦しんでいるのは誰なんだって。われわれ阿賀野川の住人なんだ。おかげで川の水が水温が下がったり、魚が住めない川になってきている。

綺麗だったんだよねえ。本当に綺麗な水でした。わずか100年も経たない間にこんな世の中になるとはね。

人間が生きてくためには、やはり自然というものが絶対必要なんです

栄一さん：インターネットでもなんでもある、便利な世の中になりましたけど。人間が生きてくためには、やはり自然というものが絶対必要なんです。便利さのために、そこに住んでる人達が苦しむことだけはしてほしくない。

自分たちさえよければいいという今の政府のやり方は、許せないことだなと思いますけどね。自分のところだけでなく、世界に目を向けて守らなくてはいけないということです。私たちはあと生きて10年、生きてられるかも分からないけど、この現状のまま進んでって、本当に幸せな世の中になるのかなあと思うことはありますね。

年江さん：こういう時代ですから。子どもを残して死にたくないですね。娘も体調が悪いと言っていますからね、娘を残して死にたくないですよ。私いま75歳ですけど、あと5年生きられるのかなって思ってます。残された子どもがどうするのかあななて思います。

栄一さん：まあ、私たちがそこまで心配したってしょうがないことですけどね。皆さん若い人が考えていってもらわないとね。

人間関係からいえば、昔の方がなんでも話せた。なんでもない話が出来た。生活はそりゃ豊かではなかった。でも気持ちが豊かだった。せかせか、時間に追われることもなかった。それだけ気持ちがゆったりしていた。この家は民泊で修学旅行の子どもたちを泊めるんです。今の子どもたちには、アウトドアとかたまにいいから、こういう生活を体験させるのもやっぱりいいことだと思ひましてね。

年江さん：東京から子どもたちが来るでしょう。まず私は「何階に住んでるの」って聞くの。それで「十何階」とか言うから。その十何階をエレベーターで上り下りし、誰とも顔を合わせることもなく過ごすんです。ある子どもはね、「お母さんは勤めてるからコンビニでお弁当を買う。お父さんは残業してるからコンビニでお弁当買う。僕も当然お弁当はコンビニで買う」って言うんです。「家族みんな忙しいから」。それを思うと、田舎はおじいちゃんおばあちゃんがいてくれる。帰ってきて、電気のついている家はいい。温かみがあるから。

怖いものは無い、倒れてらんない

栄一さん：水俣病の患者さんの手の指が曲がった写真がありますね。私の指も曲がろうとしてるのか、すごく痛くてね。仕事がやりにくい。裁判が始まって3年、国が反論してきたとき、「とんでもないことを言う」と、この人（年江さん）が、こっちが腰を抜かすぐらい怒ってしまって。2018（平成30）年の3月、新潟水俣病3次訴訟の東京高裁判決が出て、原告は負けたわけですよ。その判決を国は持ち出して「ニセ患者だ」、「医者診断も信用できない」、「それは加齢だ」と。そういうことを言って反論してきたわけです。

だから私も怒るんだ。「現状を見に来い」、「現場を見に来い」と。裁判を通して、強くなりましたよ、物凄く。私の相手は国なんだが、とにかく自分が正しい、絶対負けられない。原告団も147名のうち12名が亡くなっている。私が倒れればその人たちが救われない。その気持ちが強いですよ。相手がどんな方であろうが、総理大臣であろうが裁判官であろうが怖いものは無い。倒れてらんない。この裁判も、予定としては来年（2019年）の10月までに結審して、再来年の5月頃には判決を貰うんだ。勝つか負けるか。今年と来年が勝負だと思ってます。

この裁判が早く終わることを私は願っています

栄一さん：子どもが2人いるんですけども、今は2人暮らしです。息子は全く他人の関係です。親子の関係はありません。これは私が裁判に踏み切った、その翌日からです。もう年賀状一枚くれません。孫は今大学1年生か、そのくらいになりましたけどね。小学校3年生頃から全然電話もなけりゃ顔も見たこともありません。もう自分の家族とは全く縁がありません。そういう状態のなかで、この裁判が早く終わることを私は願っています。そして孫の顔も見たい。生きてはいるんだろうから、そのうちに親子の再会もあると思っていますけど。

年江さん：私は思いません。「じいちゃんがテレビに出ている、どういうことだ」って言われて。関係はなし。電話1本でぶつっと切られましたから。

栄一さん：息子はね、お盆になると一人でお墓参りして、うちに寄らんで帰っていくんですよ。お花があつたりすると来たなど分かるんですけどもね、今年は来なかったんじゃねえかなと思う。お墓はそんな遠くじゃないですからね、すぐそこなんですからね。それでも、せっかとお墓参りに来て、うちに寄らんで帰って行くという、そんな状態です。

この元氣は酢山さんのおかげなんです

年江さん：もう、父ちゃんについて行くしかありませんから。だって同じ病気に今、かかっているから。片方ばっ

かり痛いんじゃないくて、私もだいぶもう痛みに今、堪えながらです。私はお客が来るのが嬉しいんです。本当なんです。でも、私は火を使ってはいけないということでガスの火は点けていないんです。料理も何もしないんです。だから、父ちゃんが倒れりゃ、私も倒れる。

でもこの元氣は阿賀野患者会の酢山さんのおかげなんです。沼垂診療所の関川（智子）先生の薬をいただいて、痛みのあるときに飲むようにしています。こういう病氣は誰を恨むこともできないもんね。私、耳がちょっと悪くてね、3回言っても1回聞こえるかどうかなんで、それでいつも父ちゃんには私ばかりカッカ言っているんですよ。でも、あんまり喧嘩はしないね、うちは。

栄一さん：病氣でもって聞こえなくなったのか、適当に聞こえねばちょうどいいのかは分からんけども、とにかく耳も聞こえなくなってきたね。当面の今後の目標はこの裁判を勝つこと。来年の12月までに結審をして、再来年の春までには判決をもらう。それまではとにかく必死でがんばろうと思う。その後のことはあまり考えていないね。

みなさん、考えながら成長していったほしいなと思ってます

栄一さん：あそこに、この家に民泊してくれた子どもたちのメッセージが飾られているでしょう。「じいちゃんばあちゃんありがとう」と書いてくれる子どもたちがね、年間80人くらい家に泊まっていくんです。ほとんど中学生です。千葉、栃木、埼玉、東京から、今は20校くらいかな。農村体験とかで、5月から10月まで2泊か3泊くらい。水俣病とかは関係なくて。その人たちにもね、こういう公害問題にもっと関心を持っていただいて、都会に住んでいても、こういう田舎にどんな生き方があるのかということも考えながら成長していったほしいなと思ってますけどね。

今、原発問題、これは新潟でもだいぶ関心を持ってきているようですけどもね。

福島原発の事故のあと、柏崎の原発も停止したままですが、いずれは再稼働を認められるでしょう。福島の廃炉作業や汚染水を貯めるタンクも問題になってます。タンクの水を海へ流す。大海への一滴は害はないと国は言うが、そこを生活の糧としている人にしてみれば、ある程度浄化されるでしょうが、風評被害が出る。野菜でもなんでも同じだ。しかも、一滴の毒でも、それが何百年何千年とつもり積もれば、水俣病の水銀と一緒にすよ。公害問題が起こってしまえば、長い年月をかけても元に戻らない。そういうことを忘れちゃいけない。なんでこんなに魚が減ったか。昔は川底が2m下まで見えた。今では1mでも見えない。それだけ川の水が汚れたんです。公害というものは、恐ろしいですよ、本当に。

安倍総理がね、日本の経済を立て直さなきゃと言っているけども、新たな被害者を出さないようにってことも考えなきゃいけない。常に前進してかなきゃ、日本の未来も見えてこないかもしれないけど、それで泣いたり、苦しんだり、怒ったりするのは、汚染された地域に住んでいる人達なんだよ。福島の原子力発電所で作られた電気は東京に行っているんですよ。東京のビルとか便利なものを動かすために、誰が被害を受けてるのかって。騒ぐのは現地の人ですよ。